2015 6/9
No.1996
毎月第2・第4火曜日発行

政経かながわ

一般社団法人
—神奈川政経懇話会—

ミナト横浜の初夏の風物詩「第32回横浜港カッターレース」が５月24日、横浜市中区の山下公園前の海上で行われた。市内企業や小学生など212チーム、約1700人が参加し、力いっぱいオールをこいでタイムを競った。

神奈川新聞社

政経かながわ

2015 6/9 No.1996

contents

視点・点描 3
テストで何を「測る」のか

講演録 4
「日本人がテロの標的に―現実になった『イスラム国』の脅威」
共同通信社客員論説委員、星槎大学客員教授
佐々木　伸

経　済 8
賃金上昇を起点とした好循環へ
消費、設備投資の先行きに期待

国　際 10
イスラム国大攻勢、要衝を占領
戦略見直し迫られるオバマ政権

企業最前線 12
食品大手、調理済みチルド強化
宅配弁当、まとめ買いに対応

くらし2015 14
フグ毒に匹敵、まひ性貝毒

広告珍談 16
マンガのキキメは②
タダノボンジ？

NNAアジア経済リポート 17

会員のページ 18
設立50周年は来年４月に(その12)講演録抄録①

会員のページ 19
設立50周年は来年４月に(その12)講演録抄録①
会員の動き

事務局だより

◇横浜定例講演会
2015年7月9日（木）
13時30分～15時
崎陽軒本店　5階「マンダリン」
講師は日本レストランエンタプライズ「駅弁マイスター」の
三浦　由紀江　氏
演題は「仕事は楽しく　自分に限界をつくらない」（仮題）

視点点描

テストで何を「測る」のか

２月の神奈川県公立高校入試（正式名称は「入学者選抜」）、４月の全国学力テスト（同じく「全国学力・学習状況調査」）と、テストにまつわる取材が続いた。いまさらながら、テストのありよう、評価の方法をつらつら考える。

神奈川の学校現場で「集団に準拠した評価」（＝いわゆる相対評価）が、「目標に準拠した評価」（＝いわゆる絶対評価）に変わりだいぶたつ。前者は順位に重きを置くので、極論すると百点満点のテストで全員が90点以上をとっても、相対的に下位７％の人には５段階評価の１がつく。全員が10点未満でも、上位７％は評価５だ。

対して、後者で同じことが起これば（多分）全員に５、または１で構わない（はずだ）。

テストには、「達成度をみる」と「振り落とす」ためと、２通りの使い道がある。課す方はたいてい「達成度」テストです、と言いたがる。そのハードルを跳べさえすれば全員合格。自動車運転免許や英語検定、珠算検定…。必要な技能があることが分かればよいのだ。絶対評価はこの部類に属す。

ところが入試はそうはいかない。定員は決まっている。全員がハードルを跳んだとき、それでも「跳べたからＯＫ」と全員入学させる合意も覚悟もない（学校にも社会にも）。だから「振り落とす」仕組みが必要になる。得点順に並べる相対評価は「振り落とし」に使うのに適している（ただし並べる際に使う〝物差し〟が違うとまたモメる。中学内申点の学校格差問題ですね）。

とりあえずのゴールである「入試」が、振り落としタイプなのに、その前段階で「達成度をみているよ」と言い張る。〝達成度は理想で振り落としは現実、だから理想に向けて改善していく〟というのならまだしも、その矛盾を自覚せず、達成度テスト（と称したもの）の結果を並べて比べて、〝○○より劣っているからもっと頑張れ〟と激励する。どころか、劣っている学校や地域をさらし者にする。…やっぱり変だ。

あるエッセーで「学校が期末テストで成績を付けるのはおかしい」という意見を読んだ。テストをするのは生徒のつまずきを発見するためで、ならば早く見つけて手当てするのが教師の務め―というのだ。極論だが正論。料理を作って最後に味見をして「塩味が足りない」と分かったのに塩を足さない料理人なら、要らない。

（神奈川新聞社教育担当部長　青木　幸恵）

広告珍談

マンガのキキメは②

宮野　力哉

タダノボンジ？

まず、図をご覧あれ。

１９３３（昭和８）年９月、朝日新聞に掲載された全ページ広告。いちばん上に《人生勉強》、《只野凡児君の商品めぐり》とある。麻生豊（あそうゆたか）は、朝日の連載マンガ《只野凡児の人生勉強》の作者である。タダノボンジ！　じつに小市民的な、いい題名ではないか。

全ページを６コマに分けて、それぞれタダノボンジが主役。右列最下段がおもしろい。

「海カラ帰エッタラナノ。イヤァネ。凡児サン。ナニモジモジ　シテルノヨ。キマリガ悪イジャナイノ。早ク一二三　塗ツテヨ」と若奥さん。「僕ダッテ　キマリガ悪イデス。デモ一二三ナラ一回ヌッタラ、癒ルカライイデス。コンナキレイナ肌ヲ荒スナンテ、憎イ皮膚病ダァ！」。外用常備薬一二三、ひふみとあるのは広告主。

タダノボンジは大学生、あるお金持ちの坊っちゃまの家庭教師をしている。左列上がたのしい。「アカイタイヨーノ　テルナギサー」と坊っちゃんが歌った。それを聞いていたおじいさんが、「坊ヤハ物覚エガイイノウ」と。教師のボンジが「ビクターレコードナラ、ドレダッテ坊チャンニオキカセ出来ルト思マス」。お茶をもってきたお手伝いさんが「マァ、結構ナオノドデゴザイマスコト」とゴマすった。

手前の長椅子に座ったおばあちゃんが、「今度ハ先生ニ東京音頭ヲカケテ頂キマシヨウネ」というと、お姉さんは「ソレヨリ今度出タ『港の灯（ともしび）』ヲ先ニシマシヨウヨ」と。長椅子の背中に、「御家庭でも聴かれる流行歌　ビクターレコード」と広告主。

只野凡児の連載が始まって４ヵ月目、おそらく着目度が高い、広告ページだったろう。《東京音頭》は西条八十作詩・中山晋平作曲。その年８月に発表、盆踊りで熱狂的に流行した。築地に中央卸売市場が完成、有楽町に日劇がオープンした年でもある。

マンガ家・麻生豊は１８９８（明治31）年生まれ。北沢楽天（らくてん）に師事、報知新聞に入社。１９２４（大正13）年からマンガ《のんきな父さん》を連載。失業した主人公が社会を風刺するテーマで大ヒット。33（昭和８）年から朝日新聞の専属になり、５月３日の夕刊から34（昭和９）年７月31日まで、《只野凡児の人生勉強》を執筆した。

麻生の師匠・北沢楽天は、福沢諭吉に請われて時事新報に風俗・風刺マンガを連載。雑誌《東京パック》を発刊するなど、近代マンガのリーダーだった。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）

（図）「只野凡児君の商品めぐり」１９３３年（昭和８）年９月21日、東京朝日新聞掲載